

トピック

ホッキョクグマの生態について

—天王寺動物園長にインタビュー—

大高 望 (CASA ボランティア)

「白クマ」と呼ばれることも多い「ホッキョクグマ」は、地球温暖化で絶滅が危惧され、ここ最近になってよく耳にする動物の一つに数えられる。CASAでも白クマ帽子がCOP15で活躍したばかりだ。

2010年3月15日に、幼い頃によく遊びに連れて行ってもらった大阪市立天王寺動物園を訪問し、当時園長の宮下実さん(写真)にインタビューをした。ホッキョクグマを中心に、その生態と地球温暖化の影響について、幅広く貴重なお話を伺ったので、以下にまとめる。



「ホッキョクグマの生活について」

地球温暖化の影響で、ホッキョクグマの生存が危ぶまれている。温暖化が進むと、彼らが生息する北極圏の海水面積が減少するばかりではなく、その厚みも薄く、脆くなってきている。このような海水の変化によって彼らは生きていく上で最も重要な食料の確保が難しくなっている。

一般に彼らはアザラシを主食としており、アザラシが作った氷の呼吸穴からアザラシが顔を出すのを静かに待ち、出てきたところを捕えている。アザラシの栄養価は非常に高く、重要な食料になっている。基本的に群れを作らないホッキョクグマは、アザラシの呼吸穴を見つけさえすれば、容易に捕獲できて好都合である。このようにホッキョクグマは子育て中の母子以外単独行動をしており、夫婦とか家族という関係は形成しない。

オスは3～6月に発情する。メスは、妊娠し出産が近づくと、雪で作った巣穴に独りこもり、なんと雪などの水分以外は一切食べ物を口にしないで、静かで真っ暗な雪穴に身を潜める。そして子どもが生まれると、さらに絶食を続けた



まま、3ヶ月ほど雪穴で母乳を与えて育てる。このことから出産前の食料確保はメスグマだけでなく新生児にとっても死活問題である。

「ホッキョクグマと生物多様性」

このまま地球温暖化が進んで、広い北極圏の氷のあちこちに大きな亀裂が入ると、従来行き来していた所が、分断されてしまう可能性も十分考えられる。分断化が起こると、彼らは限られた土地の範囲内で生殖活動をしなければならなくなる。そうすると、ゆくゆくは血がつながった者同士で繁殖を繰り返す、近親繁殖のおそれが危惧される。現在の科学的なデータによれば、ほとんどの種で近親繁殖が繰り返される

と、流産や虚弱な子ども、あるいはどこかに障害を持った子どもが生まれたりするといった近交劣化が起こるとされている。

例えば中国四川省に住むジャイアントパンダは、ごく最近まで四川省全土に生息していたが、中国の工業化が進むにつれて、森林に道路が入り込み、人々が行き来するようになったために、生息地が分断されつつある。このようにジャイアントパンダもまた近交劣化のおそれが出てきており、今後遺伝的多様性を失う危険性も生じている。一方例外として、日本でもペットとしてよく見かけるゴールデンハムスターは近親繁殖を行っても何の影響も現れない種の代表格である。かつては中近東からヨーロッパ南東部に分布していたが、野生の状態では絶滅の危機に瀕していた。しかしその後、1930年に野生で捕らえた中のわずか3頭を祖先として、ペットなどの商業目的や医療目的で、膨大な数の繁殖に成功している。

絶滅の危険が高まっているホッキョクグマについても、近交劣化が考えられるとした場合、いったん近交劣化が起こり始めると、子どもが生まれたとしても自然環境に適応できなくなり、やがては淘汰されて、絶滅の危険が高まることになる。

また、野生の場合あるいは飼育の場合も、オスとメスが最低限どの程度の個体数いれば、将来にわたってその種を維持できるのか？このような動物の適正な個体数を把握することは非常に難しい。

動物園での繁殖を考えると、個体数が極端に少ない場合、血の繋がりの上で、その種は繁栄の幅を狭めてしまうことになる。

そのため、全国の動物園では希少な動物すべてを血統登録しており、100～150年先を見込んで、遺伝子の多様性を失わずに飼育・繁殖が可能かどうかをコンピューター管理することも可能となった。仮に父親・母親が判らない場合は、DNA検査で先祖を調べている。そうすることで、全国の動物園に、各動物についてオス・メスがどのくらいいるのか、また繁殖可能な動物はどのくらいで、また父親・母親は誰なのかを判別している。その結果、繁殖計画に参加できる個体はそう多くないことがわかってきた。

野生のホッキョクグマは、現在はおよそ2万頭が生息している。温暖化の影響によって個体数の減少が叫ばれているが、実際彼らの種保存のために必要とされる適正な個体数というのは現段階では未知数であるため、現在の2万頭という数字が適正な数であるかどうかの判断は難しい。

「天王寺動物園の取り組み」

天王寺動物園では多くの種類の動物の繁殖に努めており、その実績も認められている。ホッキョクグマの場合、出産の前後は自然界と同じような暗く静かな閉鎖空間が必要で、天王寺動



物園でそのような環境を作るのは難しく、出産は無理と言われていたが、関係者の努力と工夫により1987年に出産に初めて成功し、それ以降8度の出産で4頭の赤ちゃんが成育した。

現在、天王寺動物園にいるホッキョクグマは2006年にロシアから来たゴーゴくん(写真)です。(551の株式会社蓬萊が導入に係る費用を全額負担し、それにちなんでこの名前が付けられたそうです)。ぜひ一度、みなさん見に来てください!

宮下園長さんの話を伺って

今回、ホッキョクグマの生態について初めて詳しく知ることができた。彼らが栄養価の高いアザラシを捕るためにも、分厚くしっかり固まった氷が必要であり、このように温暖化によって氷が減少していくことは、彼らの生存を脅かしている。またさらに生息場所である氷の減少は、彼らのすみかを分断し、種の保存という視点からも、繁殖を難しく

してしまう。現在生息している彼らの野生の個体数はおよそ2万頭であるが、この数が彼らの繁栄にとって適正がどうかは誰にも判らない。今回の取材で、種の保存という視点から、保存のための適正な個体数が判らないからそのままにしておくというのではなく、判らないなら被害を最小限に抑えるよう、個体数をこれ以上減らさないという考えが大切であることが改めて実感できた。

最後に、宮下園長には貴重な時間をさいて話をいただきありがとうございました。この場を借りてお礼申し上げます。



第10期CASA総会の案内

日時 6月19日(土) 10:30～12:00

場所 エル・おおさか南館 南103号室

議案 第1号議案「第10期活動報告の件」

第2号議案「第10期決算報告承認と監査報告の件」

第3号議案「第11期事業計画承認の件」

第4号議案「第11期収支予算案承認の件」

* 同日午後、地球環境大学第2回があります。(p18参照)